

## 都市化と過疎化 — 宗教浮動人口の行方 —

戦後の高度経済成長期のただなかにおいて、都市化にともなう人口の都市集中と過密問題に対置される問題として、地域社会の「過疎化」がクローズアップされたのは1966年のことであった。その後、人口流動にともなう地域社会の基礎的条件の破綻と地域社会の生産力の低下を中心に議論されていた過疎化の問題は、急速に進展する少子高齢化を背景とした地域共同体の崩壊と日本社会の構造的な変化として意識されるようになり、近年では「限界集落」というような、刺激的な言葉も使われるようになってきている。

「限界」という言葉の妥当性については異論もあるだろうが、1980年代あたりを起点にして、戦後の急激な社会変動のもとでもある程度は維持されてきた日本人の生活様式や地域共同体のあり方が、根本的に転換しつつあるという意識は、多くの人々が共有している実感ではないだろうか。

このような社会と生活意識の変化は、当然のように人々の宗教意識や信仰活動のあり方に大きく反映されていくことになる。今回の公開教学講座では、主に戦後の日本社会の急速な変化のなかで、これまでに論じられてきた日本人の宗教意識の変化や既存の宗教団体の時代に応じた取り組みなどを紹介しながら、これからの日本の諸宗教及び天理教の活動の可能性と課題について考えてみた。

\*

まず、戦後の都市部への急速な人口流入と地域社会の構造変化から議論をはじめ、高齢化が進んで65歳以上の住人が人口比の50%以上になり、地域共同体の機能維持が限界に達している「限界集落」が注目されるようになった、近年の状況を確認した。

戦後の都市への人口集中と地域社会の過疎化が議論される社会状況のもとで、主に同時代的な宗教と社会の相関関係に注目する宗教研究者は、人口の流動化による地域社会の構造変化や都市部の新住民たちの「宗教浮動人口」化に注目した。生まれ育った地域における、地縁・血縁・宗教共同体を基盤とした紐帯から物理的に切り離された人々は、新しい「つながり」と共同体を新しい宗教運動に求め、個人の信仰を基盤とした新しい共同性に「安心」と「救い」を求めていく、といったストーリーが当時は活発に紡ぎだされた。こうした状況を背景として、伝統的仏教教団の多くは、近代的な「教団＝宗教」モデルにもとづく組織機構の「近代化」や「再編成」に取り組んでいく。

しかし、高度経済成長期にも日本の地域共同体は大きな変化を見せず、都市部へ移住した人々のすべてが旧来の地縁・血縁共同体との関係を断ち切り、都市部に新しい村落共同体を形成することはなかった。また、伝統的な宗教活動が個人の主体的な信仰を基盤とする、「近代的」な宗教として再編成されることもなかった、というのが現実ではなかろうか。

これには、核家族化のような家族構成の変化や右肩上がりでも推移してきた人口の増加も関係しているだろうが、基本的には戦後の日本の地域共同体そのものに、根本的な変化が見られなかったことが要因の一つだろう。しかし、平均寿命が劇的に伸びる一方で、経済成長が急激に減速し、少子・高齢化や若者の晩婚化・非婚化が急速に進むなかで、各種メディアによって「無縁社会」と喧伝されるような、日本社会の根本的な構造変化が目目の現実

となってきたのである。また、かつては地域共同体と密接に関わっていた人々の生活文化や宗教意識も大きく変わりつつあることは、さまざまな社会調査が明らかにしつつある。

このような劇的な変化を前にして、各種の宗教団体に地域共同体や人々の絆を支える「ソーシャル・キャピタル」としての役割を期待し、宗教の社会貢献や社会的役割を強調する議論が広がっている。東日本大震災などの経験を経て、あらためて再認識されるようになった地域社会における「宗教」の役割については、人口減少社会の到来とともに、とくに過疎化の進む地域における可能性が注目されるようになってきた。

当日は、文化庁宗務課が刊行している『宗務時報』に掲載された論文や講演録を紹介しながら、人口減少社会のなかで「宗教」が果たしている—あるいは、果たしうる—役割や可能性について考察した。「限界集落」に分類され、今後は消滅する可能性があると思定されている地域には、多くの宗教法人が存在しており、これらを「限界宗教法人」と呼ぶ議論も紹介した。

とはいえ、「限界集落」は決して「限界」ではなく、現在ばかりでなく将来においても多くの可能性を持っているという議論がなされているように、「限界集落」に所在する宗教法人は、決して「限界」でもなければ消滅の可能性に直面しているわけでもない。講座のなかでは、過疎地域に存在している宗教法人の役割を研究し、地域内あるいは地域外とのネットワークの中心点となる可能性について言及した最近の調査などを紹介しながら、むしろこうした現状においてこそ、地域社会において各地の宗教法人が、今まで以上に重要な役割を果たす可能性があることを強調した。とくに、災害救援活動や里親活動、各種の教育・福祉活動の実績をもつ天理教の教会には、より大きな可能性があるはずである。

\*

戦後の人口の都市集中とともに注目された「過疎化」問題は、時代の推移とともに人口流動と日本社会の構造変化の問題から少子・高齢化と人口減少の問題に転換し、日本の伝統的な文化や宗教意識を含む社会や文化の根本的な変容をもたらしつつある。とくに、1990年代以後に顕在化してきた日本人の宗教意識の変化を考えると、過疎化と宗教という課題と連動して考察されてきた「現代社会と宗教」というテーマは、新たな装いのもとに、あらためて議論されるべき重要性を持っている、といえるだろう。

とくに、統計上の「限界宗教法人」を多く抱える天理教の場合は、現在の状況を危機（ピンチ）よりは好機（チャンス）と考えて、一日の長があるソーシャル・キャピタルとしての側面をさらに充実し、本当の意味で「深みの次元」の喪失に直面しつつある人々に、真の人間としての生き方を伝えていく努力を積み重ねて行くべきだろう。

「月日のやしろ」としての教祖の教えは、人々が伝統的な宗教的世界観や人間観から切り離され、「無意味性の不安」に直面する現代においてこそ、よりその輝きを増すのではなかろうか。当日は、「おさしづ」のお言葉をいくつか紹介しながら、これからの時代に教祖の教えを生かす可能性を語って、公開講座を締め括った。